

J-J・アンペールのレカミエ夫人宛書簡：スタン ダール関連資料の再検証

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1563564>

出版情報：Stella. 34, pp.105-113, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

J-J・アンペールのレカミエ夫人宛書簡

——スタンダール関連資料の再検証——

高 木 信 宏

スタンダールとジャン＝ジャック・アンペール（1800-1864）の関係について詳しいことは分かっていない。高名な物理学者アンドレ＝マリー・アンペールを父にもち、長じてはコレージュ・ド・フランスの講壇に立ち、顕職とされるマザラン図書館司書を務め、フランス学士院の碑文・文芸アカデミー、さらにはアカデミー・フランセーズの会員に選ばれるなど、学者として輝かしい経歴をもつジャン＝ジャックが、17歳年長の作家との間で交わした書簡は数通しか見つかっておらず¹⁾、交際の実相について知りえるところはごく僅かである。それゆえ本稿でとりあげる前者のレカミエ夫人宛書簡は、彼らの関係を考察するうえでの資料的な価値をいささかながら有するのだが、その具体的な検討に入る前に、まずは両者の交友を概観しておきたい。

ふたりがいつ初めて出会ったのかは特定できず、スタンダールがミラノからパリに戻った1821年6月以降としかいえない²⁾。1823年末から翌年にかけて、彼らが冬のローマで再会したのは確かで、作家が友人アドルフ・ド・マレストに送った1824年1月23日付の手紙にその言及がある——「素晴らしい天候！ シャバネ氏、アンブ〔アンペール〕氏、新しい友人たちと遠出」³⁾。スタンダールは前年の晩秋に単独でジェノヴァ、リヴォルノ、フィレンツェ等を巡り、12月にローマに到着、他方アンペールは哲学者バラシユらと数名でレカミエ夫人に付き添い、同月15日に古都を訪れた⁴⁾。さらに、ふたりと親交のあった「シャバネ」こと美術批評家ドレクリューズと後に政治家となるデュヴェルジエ・ド・オーランヌが参着する。予期せぬ再会に意気投合した4人は、アルバノ山地で野遊びに興じ、画家シュネッツを訪問している⁵⁾。

1824年中にそれぞれ帰国したスタンダールとアンペールは、その後もパリで顔を合わせる機会が一再ならずあった。ふたりともドレクリューズが日曜日に

自宅で開く「アカデミー」の常連であり⁶⁾、また世に聞こえた博物学者ジョルジュ・キュヴィエのサロンの常客でもあった⁷⁾。他にもドレクリューズの義弟にあたる建築家ヴィオレ・ル・デュクの催す集いや、スイスの政治家フィリップ・アルベール・スタップフェールによる夕べの会にも通っている⁸⁾。領事に任命されたスタンダールが1830年11月にイタリアへ赴任するまでの間、このように彼らが社交の場で度々言葉を交わし、親睦を深めたことはまず疑いのないところであろう⁹⁾。

チヴィタヴェッキア駐在フランス領事となったスタンダールは1831年10月、王立植物園の植物学者アドリアン・ド・ジュシューを伴ってイタリアを訪れたアンペールと再会する。「ローマの外港」に到着したふたりを迎えた作家は、タルクイーニアのエトルリア墓地遺跡に彼らを案内し、ローマ観光のガイド役を買ってでるなど大いに歓待したばかりか、翌年1月にはふたりに同行して3週間ナポリへ旅行している¹⁰⁾。これより3年を経ずして外交官と篤学の士は後会することになるが¹¹⁾、しかしこの時の後者のイタリア滞在は思いもよらぬ結末で締めくくられる。

1834年12月12日、帰国の途に就くアンペールを乗せた蒸気船アンリ4世号が、現トスカナ州のポルト・エルコレとジリオ島の間、岸から100メートル付近で難破する。乗客と船員は皆、36時間もの間、岩のうえで救援を待った。スタンダールは領事として救助隊を派遣し、外務大臣アンリ・ド・リニー伯爵に詳細な報告を上げ、アンペールの父アンドレ＝マリーやサント＝ブーヴにジャン＝ジャックの無事と事故の概要を手紙で伝えている¹²⁾。

その後のふたりの交際については、現存する彼らの書簡5通からは容易に推し量ることができない。スタンダールが賜暇をえてパリに逗留した1836年5月24日から39年6月24日までの3年間、彼らの間でなにか変化があったのだろうか。1838年2月15日付のアンペールの書簡は次のように書き出されている——「ご親切にも私の手紙をお読みいただき、また芳書をくださり、ありがとうございます。マドレーヌのカフェで夕食をとりましたが、お会いすることはできませんでした。私はコーマルタン通りへお目にかかりに参ろうと毎日思っていました」¹³⁾。同じ年のものと推定されるアンペールのべつの手紙も、「どうして私たちが会わないまま、これほど長い時がたってしまったのでしょうか。大兄を探しに出ようと何度も考えましたが、毎日なにかしら障碍が起こったと

いう以外、私にはなにもわかりません」¹⁴⁾と冒頭にあり、両者の会う機会がめっきり減った様子を伝えている。残念なことに、これ以降の時期にかんする一次資料は見つかっていない。

以上が両者の交際のあらましである。ところでアンペールがスタンダールを作家としてどう評価していたかは興味をそそる問いであろう。E・T・A・ホフマンの独創性とフランス幻想小説への影響をいち早く指摘し、さらには『悪魔の恋』の著者ジャック・カゾットを同ジャンルの草分けと見定めたアンペールの炯眼と功績を、ピエール＝ジョルジュ・カステックスが『フランスにおける幻想小説——ノディエからモーパッサンまで』の序論で高く評価しているように¹⁵⁾、その批評眼はけっして侮れないからである。スタンダール作品に対する彼の見解を示す資料は僅かしかないが、貴重な一例として次に挙げるレカミエ夫人宛の書簡がある。少々長いが訳あって全文を引く――

イエール、1829年10月20日

^{あなた}貴女はなんとお優しいのでしょうか、これほど親身で詳細な芳書を送ってくださるなんて。不遜なことに私は、貴女が人生でこれよりもっと長い手紙をお書きになったことがないと考えました。

相変わらず父は少々咳をします。回復は緩慢ですが、しかし父が全快すると確信がもてるようになりました。そう考えるには、かなり勇気がいりますが。私たちの生活はほとんど整いました。馬車での散策やチェスの勝負、朗読などをしますが、とりわけ諸科学の分類に没頭することで、父が余暇をうまく過ごせるのを願っています。その仕事はととも注目すべきものとなるでしょう。それは私にも分かる話題なので、父はいろんな考えを思いつくたびに私に話して聞かせるのを喜びとしています。難しいのは、彼にあまり喋らせすぎないようにすることです。

私のほうは自分の仕事に再び取りかかりました。私たちはとても早く就寝するので、私は朝早く起きることができ、父の起床前に決まって4時間を自分の仕事に割いています。この4時間と、私が機を逃さず確保する一日の残りの時間のおかげで、仕事はおおいに捗ると思います。私はこの地で、当てにしていなかった勉強の手段がえられそうです。いったい誰が信じるのでしょうか、私はここでサンスクリット語と地質学を熱愛する人物を見つけたのです。あいにくとティエリーはここから一里離れた田舎にとどまっています。私は毎晩、我を忘れてクーパーやスーザ夫人の小説を読んでいます。私と同じくらい小説を愛する者は誰もいません。また偶々、^{たまたま}なかなか面白い本を入手しました。それは、筆名がスタンダールという、あの変わり者のペールの『ローマ散歩』です。素晴らしいことに同書は、我が人生で最も甘美で最も波乱多き時期のひとつをありありと思い出させてくれました。

貴女が私に伝えられた問題のことで、メリメに手紙を書くつもりです。我が友人た

ちに示されたご好意に感謝申し上げます。やがて議会が開かれます、なんとという時に！パリに戻らなければなりません、ああ！この気候は私たちの帰京を早めるのに、はたして適しているでしょうか。

さようなら、新しいアパートマンで時には私のことをお考えください。¹⁶⁾

ここには同年9月に上梓された『ローマ散歩』についての感想がごく短く述べられている。その読書によって心を動かされたというアンペールの打ち明けは、相手が彼の恋い慕うレカミエ夫人であるだけに嘘偽りあるまい¹⁷⁾。当時類書が少なくないなか、グループ旅行の見聞録風に書かれたこの斬新なガイドブックは、夫人と過ごしたローマでの日々を彼の脳裡に鮮やかに蘇らせたのだらう。かかる真率な感動の表明は、『パルムの僧院』への称賛をハンスカ夫人に伝えるバルザックの例を彷彿させる¹⁸⁾。後者にあつて心底からの感嘆がかの「バール氏論」執筆の原動力となったのと同様に、アンペールもまた後年、『両世界評論』誌上で『ローマ散歩』に触れ、「じっさいに彼と共にローマを散策するのはおおいなる喜びであり、チヴィタヴェッキアの寂しい領事館に隠棲しているよりも、パリで絵画史を講じるほうが彼にはよほど相応しい」とスタンダールを称えることになる¹⁹⁾。

ちなみに、この手紙は1875年にエツェル書店が出版したアンペール父子の書簡集に収録されて今日に伝わっている。筆者はフランス学士院の図書館において実物を検見する機会をえたが、驚いたことに文面には少なからぬ相違があった。以下が書き写した原本のテキストである――

イエール、1829年10月20日

貴女はなんと素敵なのでしょう、これほど親身で詳細なお手紙を書き送ってくださるなんて。私に日々の生活に対する意欲をもたせ、遠く離れた私をできる限り慰めてくださりたかったのです。私と、そして私に寂しくつらい思いをさせている方のために、そうした一日一日を貴女は思やり深くも惜しんでいらっしゃる。不遜なことに私は、貴女が人生でこれよりもっと長い手紙をお書きになったことがほとんどあるまいと考え、かくも長々と貴女を一人占めできたことに感激しているのです。私は当地で手紙の束を手にとると、真っ先にバランシュ氏の筆蹟のものに飛びつきました。そのなかに別の手による書状が包まれているのを期待したからです。私はまず小さな字体のものを貪り読みました。貴女はご自分の字を悪く言われますが、おそらく私にはちゃんと読めるのです。なぜならこのうえない喜びを覚えたのですから。そのあとで私は自分の宝物を携えて、海辺の草原に足を運びました。そこは、私の心を満たしている印象のように甘美な場所でした。陽の当たるところに腰を下ろし、ゆっくりと時

間をかけて一行一行、一語一語を読み返していると、貴女の足もとに座った時に感じるような気持ちになりました。

私たち親子はルノルマン夫人が住んでいる館に落ち着きました。いずれ彼女のアパートマンの一部までも占めることになりそうです。ですから私は父がここで快適に過ごせるよう願っていますし、パリから200里離れていても、私たちの住まいでは、まだアベイ＝オー＝ボワ修道院の影響と庇護を感じていたいのです。相変わらず父は少々咳をします。恢復は緩慢ですが、しかし父が全快すると確信がもてるようになりました。そう考えるにはかなり勇気がいりますが、この冬を耐え忍ぶのにも私には勇気が必要となるでしょう。というのもまるまる一冬かかりそうだからです。

私たちの生活は、馬車での散策やチェスの勝負、僅かな仕事、そして朗読によってほとんど整いました。父が余暇をうまく過ごせるよう願っています。私のほうは自分の仕事に再び取りかかりました。私たちはとても早く就寝するので、私は朝早く起きることができ、父の起床前に決まって4時間を自分の著作に割いています。何事も私の仕事から奪うことのできないこの4時間のおかげで、それは大いに捗ると思います。私が機を逃さず確保する一日の残りの時間は、執筆をさらに進めるためか、あるいは他の学問のために用いられるでしょう。この地で私は、当てにしていなかった勉強の手段がえられそうです。いったい誰が信じるでしょうか、私はここでサンسكريット語にくわえ、地質学にも専心している人物を見つけたのです。あいにくとティエリーはここから一里離れた田舎にとどまったままなので、明日彼に会いに行きます。貴女からお聞きした問題のことで、プロスペール・M〔メリメ〕に手紙を書くつもりです。我が友人たちに示されたご好意に感謝申し上げます。

貴女の優しい言葉を私にもっと辛抱強く待たせるために、バランシュ氏が何かしら詳しい情報をまた書き送ってくれると嬉しく思います。というのも貴女はこれからも時々私にお便りをくださるでしょう？ オランジュで出した私の手紙を彼が受け取っていたらいいのですが。オランジュで父と私は友人たちと共に、彼がいないのをとても残念に思いました。

私は今しがたルノルマン氏の素晴らしい手紙とルノルマン夫人の短信を落掌したところです。ふたりの思い出にとっても心を動かされました。すぐに彼らに返事を出すつもりです。さようなら、新しいアパートマンで時には私のことをお考えください。ご新居を私に馴染ませるために。²⁰⁾

一読して明らかなように、どこにも『ローマ散歩』にかんする記述はない。そればかりか手紙のオリジナルに照らすと、書簡集のテキストには書き換えられた箇所が数多いことに気づく。贋造といっても過言ではない操作をなせたのか、編者アンリエット・ミシュルーの意図をはかりかねるばかりである。では、肝心の『ローマ散歩』に触れた条くだりはというと、アンペールがレカミエ夫人に宛てた別の手紙にそれは現れる――

1830年1月12日

なんと冬でしょう。ほとんど雪を知る事のないこの国で、今しがた3度目の雪が降りました。オレンジの果実は凍てついてしまい、人びとは目下、オレンジの木のを心配しています。すでにマルセイユではオリーブの木が枯れはて、国中がひどく激しい不安に陥っています。南仏に来て滅多にない冬を迎えてしまうのは辛いのですが、しかし父にとってはパリの華氏12度を避けられたことのほうがはるかに幸せなのです。こちらでは氷霧が続くなかでも、6月のような日が幾度となくありました。おそらく2日後には、2、3日前のように寒さもゆるみ、心地よい日和になるでしょう。私は父が一年のうちで最悪な時期をよく耐え忍んでいるのを見て嬉しく思っています。父は血色もよく上機嫌で、諸科学の分類に勤んでいます。この仕事は、私に分かる彼の研究の話がそうであるように、とても目覚ましいものとなるでしょう。父はいろんな考えを思いつくたびに、私に話して聞かせるのを喜びにしています。私としては彼にあまり喋らせすぎないように努めていますが、私のほうは天候に恵まれず、もう仕事をするための時間がありません。気晴らしとして毎晩、我を忘れてクーパーやスーザ夫人の小説を読んでいます。私と同じくらい小説を愛する者は誰もいないでしょう。また偶々、なかなか面白い本を入手しました。それはメリメの友人で、筆名がスタンダールという、あの変わり者バールの『ローマ散歩』です。素晴らしいことに同書は、我が人生で最も甘美だった時期のひとつをありありと思い出させてくれました。私はこれを読みながら、自分がサン＝ピエトロ大聖堂やコロッセオ、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂にいるように感じます。そしていたるところで貴女とともにいる自分を見いだすのです。是非また一緒に旅に出られたらと願っています。心和睦時間を一度ならず台無しにしてしまった気まぐれを、私が以前のように起こすおそれはないと思います。それに貴女にとってなんと幸せなことでしょうか、私が今そうなっているような、物事に精通した有能な人間を意のままにできるなんて！旅行への愛着と貴女への深い愛情をもつこの私が、至上の幸福を夢想するならば、それは大街道で貴女と馬車に揺られることにほかなりません。私たちは皆でギリシアのとある講堂を訪ねたりもできるでしょう。とはいえ、そこでドイツの国王に出くわしたりすれば、どれほど苛立たしいことか。ルノルマン氏はさぞ遺憾に思われるに相違なく、私も同じです。やがて議会が開かれるでしょう。なんとという時に、パリにいななければならないなんて！ああ！この気候は私のパリへの帰京を早めるのに詭え向きとは思えません。誰もが話してくれるのは、早々と当地を離れてしまったために病が再発した人びとの例ばかりです。しかも父が私を必要とするのは、とりわけ旅行のためなのです。彼にはそれを辛抱するのが難しい。ギゾーが親切にも私に手紙を書いてくれましたが、いつまでも返事を待ってはくれないでしょう。私にできることよりも少々多い務めを習慣的に毎日自分に課していたなら、彼に返信をとっくにせねばならないのですが。私の近況をお伝えいただく相手なら貴女は皆ご存知です。バランシュ氏は親切心から、恐ろしい今月15日がどのように過ぎたかを私に2行で書いてくれるでしょう。さようなら。さようなら。²¹⁾

これによれば、まずアンペールが『ローマ散歩』を読んだ時期は3カ月ほど異なるばかりか、書簡集で活字になったテキストが元の手紙2通の恣意的な混ぜ合わせであるのが分かる。しかも、問題の箇所についても改変が認められよう。とりわけ「メリメの友人」という削除された文言は、当時の彼らの交際を考察するうえで重要である。アンリ・マルチノの推測するように、スタンダールがレカミエ夫人と顔を合わせる機会もあっただろう²²⁾。しかし、「メリメの友人」という補足的説明は、作家が彼女の知遇をえるまでには至らなかったことを窺わせる。1823年から24年にかけての冬のローマで、スタンダールが高名な夫人に拝眉する僥倖はほとんどなかったのではあるまいか。

翻ってプロスペール・メリメのほうは、アベイ＝オー＝ボワ修道院でのレカミエ夫人の「セナークル」に迎え入れられている²³⁾。アンペールとは20年代初めに知り合っており、年齢が近いためか彼らは馬が合ったようだ。前掲した1829年10月20日付書簡の、「貴女からお聞きした問題のことで、プロスペール・M〔メリメ〕に手紙を書くつもりです」という記述が示すように、ふたりは互いに良き相談相手であった。1841年に連れ立ってオリエントを巡る旅に出るほどの親密な関係は、アンペールが亡くなるまで続いている。

最後にもう一点、愚見をくわえて擱筆したい。『ローマ散歩』に触れた条ではかに目に留まるのは、「あの変わり者ベール *cet original de Beyle*」という評語である。敬意こそあまり感じられないものの、ジュシュー等による作家の渾名「太ったメフィストフェレス」²⁴⁾に確かに通じるころがあるだろう。彼の仲間内でスタンダールと言え、意表をついた奇抜な言動が、やはり真っ先に思い浮かんだのであろうか²⁵⁾。それがエゴチストの被る仮面であったにせよ、彼をよく知る朋友の目には愛すべき人物と映っていたにちがいない。

註

- 1) アンペールがスタンダールに宛てた手紙が3通、後者の前者宛書簡が2通、計5通が『スタンダール総書簡集』に収録されている。Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. V, pp. 353, 354, 382, 383 et 425-429 ; t. VI, pp. 116, 117 et 160.

- 2) スタンダールは『エゴチズムの回想』第12章でドレクリューズの集いに初めて参加した時期を1822年2月頃と述べ、そこで出会った人物のひとりとしてアンペールの名を挙げている。したがって両者が出会った時期はこれ以降と考えられる。Voir STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, pp. 519-521.
- 3) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. III, p. 417.
- 4) Voir Édouard HERRIOT, *Madame Récamier et ses amis*, Paris : Gallimard, 1934, p. 368.
- 5) Voir Michel CROUZET, *M. Myself ou la vie de Stendhal*. Nouvelle version. Ouvrage publié avec le concours du Centre National du Livre, Paris : Éd. Kimé, 2012, pp. 357-358. Voir aussi Philippe BERTHIER, *Stendhal. Vivre, écrire, aimer*, Paris : Éd. de Fallois, 2010, pp. 303-304 ; Henri MARTINEAU, *Petit dictionnaire Stendhalien*, Paris : Le Divan, 1948, p. 15.
- 6) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, *op. cit.*, t. II, p. 520 ; voir aussi Étienne-Jean DELÉCLUZE, *Journal de Delécluze : 1824-1828*. Texte publié avec une introduction et des notes par Robert BASCHET, Paris : Grasset, 1948, pp. 11, 67, 82, 98, 117, 151, 302 n, 325 et 342.
- 7) Voir Charles-Augustin SAINTE-BEUVE, *Nouveaux lundis*, Paris : Michel Lévy, 13 vol., 1863-70, t. XIII, pp. 196-198 ; voir aussi CROUZET, *op. cit.*, pp. 324-325.
- 8) Voir MARTINEAU, *op. cit.*, pp. 15, 452 et 491-492.
- 9) 1825年4月17日付のアンペールの日記には、「彼〔アンドレ＝マリ－〕とベールとの間にはなんと多くの異なるニュアンスがあることか！」という記述があるが、この時期に見られる彼の言動の変化についてルイ・ド・ローネイは「メリメとベールの影響が顕著である」と述べている。Louis DE LAUNAY, *Un amoureux de Madame Récamier : Le journal de J.-J. Ampère*. Avec 6 planches hors texte, Paris : Libr. Ancienne Honoré Champion, 1927, pp. 162-164.
- 10) Voir MARTINEAU, *op. cit.*, pp. 15, 16 et 273. Voir aussi Henri MARTINEAU, *Le Calendrier de Stendhal*, Paris : Le Divan, 1948, pp. 267-271 ; STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. IV, pp. 302, 319, 322 et 323.
- 11) アンペールのイタリア滞在がいつ始まったのかは未詳である。1834年11月12日付のソフィー・デュヴォーセル宛書簡の追伸でスタンダールは、「アンペール氏とポナール氏をタルクイーニアの洞窟群へ案内してきたところです」と記している (*ibid.*, t. V, p. 298)。
- 12) Voir *ibid.*, t. V, pp. 339-344 et 346-349.
- 13) *Ibid.*, t. VI, pp. 116-117.
- 14) *Ibid.*, t. VI, p. 160.
- 15) Voir Pierre-Georges CASTEX, *Le conte fantastique en France : de Nodier à Mau-*

- passant*, Paris : José Corti, 1951, pp. 5-8.
- 16) André-Marie AMPÈRE et Jean-Jacques AMPÈRE, *Correspondance et souvenirs (de 1805 à 1864)*, Recueillis par Madame H. C., Paris : Jules Hetzel, 2 vol., 1875, t. II, pp. 4-6.
 - 17) Voir HERRIOT, *op. cit.*, pp. 316-320. Voir aussi Duc DE CASTRIES, *Madame Récamier*, Paris : Libr. Jules Tallandier, 1982, pp. 221-232 ; Catherine DECOURS, *Juliette Récamier. L'art de la séduction*, Paris : Perrin, 2013, pp. 361-379.
 - 18) Voir BALZAC, *Lettres à Madame Hanska*. Édition établie par Roger PIERRO, conservateur en chef honoraire à la Bibliothèque nationale, Paris : Robert Laffont, coll. «Bouquins», 2 vol., 1990, t. I, p. 482.
 - 19) Voir Jean-Jacques AMPÈRE, «Portraits de Rome à différens [sic] âges. Seconde partie. (1600-1830)», *Revue des deux mondes*, 15 juillet 1835, p. 164.
 - 20) Bibliothèque de l'Institut de France, Ms 4446, ff. 351-352.
 - 21) Bibliothèque de l'Institut de France, Ms 4446, ff. 367-368.
 - 22) Voir MARTINEAU, *Petit dictionnaire Stendhalien*, *op. cit.*, p. 410.
 - 23) Voir DECOURS, *op. cit.*, p. 335.
 - 24) Voir Jean THÉODORIDÈS, «Stendhal observé par Adrien de Jussieu (Rectification d'un texte erroné)», *Stendhal Club*, n° 25, 15 octobre 1964, pp. 43-44. Voir aussi LAUNAY, *op. cit.*, p. 164 ; DELÉCLUZE, *op. cit.*, p. 29.
 - 25) たとえばドレクリューズの1825年3月13日付の日記に、「べールはおしゃべりと逆説で私の若者たち全員を面食らわせ、うんざりさせている」(*ibid.*, p. 151) とある。

Remerciements :

Nous publions les traductions intégrales en japonais de deux lettres de Jean-Jacques Ampère à Juliette Récamier avec l'autorisation de la Commission des bibliothèques et des archives de l'Institut de France. Nous tenons à remercier le président et les membres de la commission de leur haute bienveillance.